



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集 色のちから

vol. 20 | 季刊 夏
2011





[特集]

色のちから

食べ物を色で愛でる、四季のうつろいを色で感じる、
気に入った色の器を身近に置く。

色は私たちのまわりに、空気のようにあって、
不思議なちからを与えてくれます。

人は、喜びのために、さまざまな色を生み出してきました。

今、静かな悲しみのなかにある日本。

色のちからが、多くの人の心に届きますように。

INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

[特集] 色のちから

02 「色」を見つめて、もっと心を元気にしよう
末永 蒼生さん

04 色をつくる
—INAXライブミュージアム「ものづくり工房」の挑戦

LIVE SCHEDULE

06 これからの催し
夏の体験教室 色で心を元気にしよう
夏のイベント みんなでどろ遊び どろんこ広場で遊ぼう!

07 光るどろだんご大会2011
2011年 やきもの新感覚シリーズ 第89回～第91回
フォトコンテスト2011

LIVE REPORT

08 開催報告
企画展 やきものを積んだ街かど—再利用のデザイン
関連イベント 瀬戸と常滑、「やきものを積んだ街かど」観察ツアー

09 2011年 やきもの新感覚シリーズ 第86回～第88回
ゴールデンウィーク特別イベント
みんなでシャボン玉を飛ばそう

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS
LETTER

vol.20 | 季刊 夏
2011

表紙写真

保育園のお友だちが「みんな
でシャボン玉を飛ばそう」
のイベントに集合。「今度は
光るどろだんごをつくりたい
ね」とおかあさん方。ライブ
ミュージアムでの楽しい一日
となりました。(2011.4.29)

撮影:加藤弘一

常滑から*

19

よろい 鎧 田の民家



常滑の裏道を散策すると黒塗り鎧田
の民家に多く出会う。奥条付近の裏
道に入っていくと出会うその鎧田の
木製外壁に注目すると、少し変わった
ところに気付く。横に張られた杉板を
縦の棧が固定しているが、その一部に
短い横棧がところどころに見える。そ
の短い棧は壁から出た下向きの金具に
はまり、縦棧を固定している。

木造建築が密集する常滑では昔、た
くさんあった黒の火による火災が多く
発生していたそうだ。火災のときに、
鎧田の外壁をすばやく外し内部の土
壁を出して延焼を防いだとのこと。そ
の後、また組みなおして外壁となる。
生活の知恵だと感心する。私が40年以
上前に住んでいた自宅も含め、日本の
民家の多くは鎧田の外壁が多かった
と思う。しかし、このよう
な仕掛けはなかった。たく
さんの人が住んでいた古い
街並みの中に旧常滑人の知
恵と工夫が垣間見られた
やきものの街ならではの仕
掛けではないだろうか。

小関 雅裕
(副館長、陶楽工房 工房長)

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できことなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



「色」を見つめて、もっと心を元気にしよう

末永蒼生

SUENAGA Tamio

色彩心理学者

色との出会い

私の父は画家で、家の中に絵がたくさんありました。父が絵を描いたり、絵の具を混ぜたりする姿を見て育ち、その絵から、今日のご機嫌だな、真剣だなとかを感じていました。「色」というものが人と人をつないだり、響きあったりするということを、子どもながらに、理屈以前に身体で感じて育ったような気がします。

色彩心理や子どもの絵の研究を始めて、「色」の力を、画家やデザイナーなど専門家だけの領域で考えるのはもったいないと考えました。色を通して気持ちを見つめる、自分を表現する、心を解き放つ。それが「色彩学校」のスタートでした。

色ってなんだろう

「色」とは何か。見えて当たり前だから考えもしないでしょう。人間にとって赤、黄、緑と見えている色は、光です。光の波長の違いを人間は色として見分けている。そういう能力を私たちは与えられている。なぜならそれが、生命を維持するために最低限必要なセンサーだから。このセンサーが働

かなくなると、身体的にも、精神的にもいろいろな不都合が起こる。今、どんな色(光)が必要かは、私たちが意識しなくても心身が知っている。食べ物と同じで「今日はなんとなく野菜が食べたいな」という時、それは体が欲しているのです。心と体が欲する色、そのエネルギーを取り込むことで生命を維持する。だから、その人に何が必要か、色の好みが出てくるのです。

民族の色・時代の色

地球上にはさまざまな色彩文化があります。地域固有の気候風土、文化、歴史に育まれた色はまさに民族の心を語ります。私たちが普段着るスーツは現代社会で働くために機能的に進歩してきた制服です。そういう中で、旅行をして民族衣装に出会うと心惹かれるでしょう。まさにその土地が育んだ色が入っているからです。

日本では、暮らしが安定した江戸時代にはブルーが好まれた。しかしそれ以前の信長・秀吉の時代は赤が好まれ、武将たちは競って自己主張するように赤を身につけた。まさに時代を象徴する色がある。色どり豊かな時代は自由で精神的にも豊かです。色が制限され、心が閉ざされる時代がいかに不幸か。それは戦争が物語っています。



現代社会の中で

私は「子どものアトリエ」で、長い間子どもたちの絵を見てきました。子どもは、その時自分に一番必要な色を選びとって、日々、動く心を自由に表現します。それによりさらに心が動いて、いきいきしてくるのがわかります。大人はどうでしょう。

仕事はこの色、もう年だからこの色…。社会規範や人間関係の中で、本当に自分に必要な色を押し込んでいると色彩センサーが鈍り、日々の心の変化や、四季の変化さえ感じられなくなってしまう。一種の心理的な生活習慣病です。自殺する人が増え続け、ストレスを抱える現代の日本社会。自分の心の動きを感じて、押し込めていた感情を上手に解き放つことが大切です。

色のレッスンをしよう

毎日の生活の中で「色」を意識して見てください。朝起きて目に入った色、クローゼ

ットの中で気になった色、「今、自分はどんな色を感じてる?」。選んだ色を通して自分の気持ちと対話してみる。街に出ても色を意識する。色どりがいい、きれいな色はどこにあるかな。色を探す時、心が動くんです。それが大事。色の知識や配色を知らなくてもいい。心を動かす一つの方法として色を楽しんでほしい。それを心がけると、自分の気持ちが見つめられるようになります。「なぜこの色を選んだのかな。緊張していたのかな」。苦しい時は、苦しいと思う色を、泣きたい時は、泣きたいような色を選べばいい。それで感情が浄化される。次に笑顔になれば色も変わる。大切なのは、自分のありのままの気持ちを粗末にしないこと。それが色に出るのです。

心の時代へ

私たちは「東日本支援クレヨンネット」を立ち上げ、震災でショックを受けた子どもの心を、絵を描くことでケアしようと活動しています。阪神大震災の時も避難所や児

童館に1年以上通い続けました。元氣そうに遊んでいても、絵を描くといつもとは違う色を使う。「この子はこんなに悲しい思いをしたんだ」。まさに色が言葉のように心を伝えてくれます。

豊かさの一方で、精神的に弱く貧しくなった日本社会。本当の意味で「心の時代」を取り戻していかなければならないと、今回の震災を受けて思いを深くしています。色は人の心を映すものであり、同時に、そのエネルギーで人の心を再生させます。なぜ色が見えるのか。なぜその能力を授かったのか。それは、色を自由に使って、もっと元氣に、幸せにならなさい、というメッセージなのかもしれません。

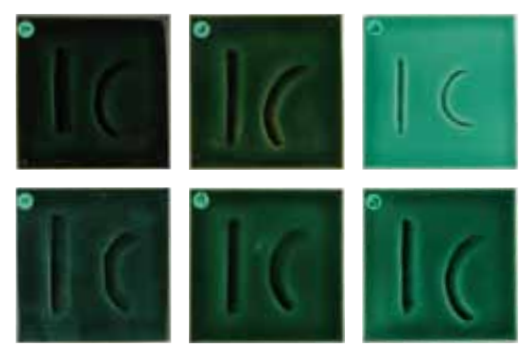


SUENAGA Tamio

講座「色彩学校」主宰。「アート&セラピー-色彩心理協会」会長。自由表現の場「子どものアトリエ-アートランド」を40年にわたって主宰し、色彩心理の研究をベースにしたアートセラピーの方法を体系化する。災害や事件などで、ショックを受けた子どもたちのための心のケアの活動にもかかわる。著書に、『答えは子どもの絵の中に』(講談社)、『色彩学校へようこそ』(共著 晶文社)、『色はここのは』(幻冬舎)など多数。

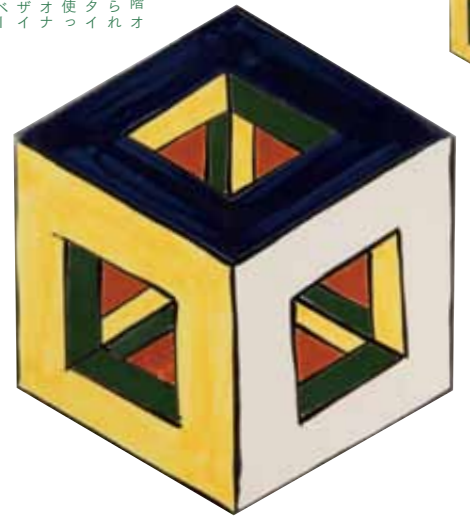
色をつくる

INAXライブミュージアム「ものづくり工房」の挑戦

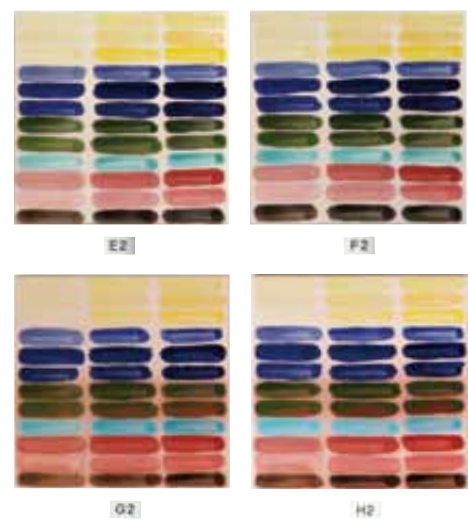


ものづくり工房が手がける「マイスターチャレンジ」で復元に取り組んだ「ワイクトリア」番線「緑復元試験」。絵が彫り込まれた素地に釉薬を施すことで生まれる濃淡が特徴のタイル。オリジナル（世界のタイル博物館2階に展示）から原形を読み取り復元に挑戦。釉薬の厚み・緑の色味・濃淡を近づけるために何十回と試験が繰り返された。

1センチ角の、小さなモザイクタイル。1951年、後に大阪万博の「太陽の塔」を制作し、今年生誕100年を迎えた岡本太郎は、伊奈製陶（現LIXIL）を訪れ、職人たちとモザイクタイル画を初めて制作した。昭和の高度経済成長期にかけて建築や公共空間を飾った数々のタイル。その貴重な資料が残る「ものづくり工房」の工房内は、異なる素地、釉薬、顔料で焼かれた色とリンドリの試験サンプルが所狭しと保管されている。微妙な濃淡を表現するパステルカラー、人目を惹きつけるビビッドな色、言葉で示せばたった一言なのに、光沢や白さ度で追求したさまざまな白。ここは、INAXが培ってきたものづくりの技を受け継いでいく場所。そして、さまざまな「やきもの色」を生みだしている場だ。



世界のタイル博物館2階オランダコーナー床に張られている不思議な六角形タイル。マジョリカ絵具を使ったこれらのタイルは、レオナルド・ダ・ヴィンチがデザインしたと伝わる。左は、ペーシスの釉薬の調合と顔料の濃度を変えた試験サンプル。



で焼くのが第2段階。窯の中で金属が化学変化を起こして色をつくる。だから、金属の種類、ほんの僅かな分量の差でも焼成の過程を経て発色は大きく変わる。窯から出して初めてわかる「やきものの色」。その意外性が多くの人を惹きつける。

「単に色を出すのはそれほどむずかしいことではありません。私たちには先人の蓄積がありますから」。企業として脈々と受け継がれた膨大な色彩データを元に、ある時はパステル、ある時はモノトーンと、時代が求める色を内装タイルなど均質性の高い製品として世に送り出してきた。

その一方で、建築家や作家とともにつくるこだわりの色がある。特にものづくり工房では、「伝統技術の復元と再生」や「アーティスト・イン・レジデンス」として、過去の優れた建築物に使われていたタイルの復元や、現代の作家が生み出そうとしている新たな色の創造に取り組んでいる。たとえば、与えられるコンセプトは「明け方の暁の色」。作家がイメージする「暁」はどんなオレンジなのだろう。あるいは今は亡きウィリアム・ド・モーガンのルビー・ラストター・タイルの輝く赤はどのようにつくられたのだろうか。作家の思いに寄り添って想像力を働かせる。金属の種類を変え、配合を変えて試作を繰り返す。「技術屋というのはプロセスが楽しいですね。頭の中で描いた色がびたっと出てくると気持ちがいいです」。色に思いを寄せ、色を生み出す、そんな人間らしい行為が、今日も黙々と続いている。



昭和22（1947）年、伊奈製陶が発売した「アートモザイク」。東郷青児、岡本太郎など当時第一線の画家に、100角の施釉モザイクタイルを使った壁面制作を依頼。全国各地の観光地、温泉などに施工された。写真は熱海富士屋ホテル浴室に使われた壁面と同じモザイクタイル（原画：東郷青児 INAXライブミュージアム蔵）。



基礎釉薬と顔料の種類、焼成温度によってどんな色が出るかの試験サンプル。膨大なデータのごく一部。こうした蓄積があるからこそ新たな色がつくり出せる。



ものづくり工房・岩崎さんの手元右にあるのがタイルに顔料を塗ったもの。真ん中がその上から透明釉をかけた状態。左が焼いたもの。中には、最初の顔料とまったく違う色になるものもあります。



岩崎さんが常に持ち歩く「色の調合メモ」。

